

中野孝次

講談社

生

中

き

世

る

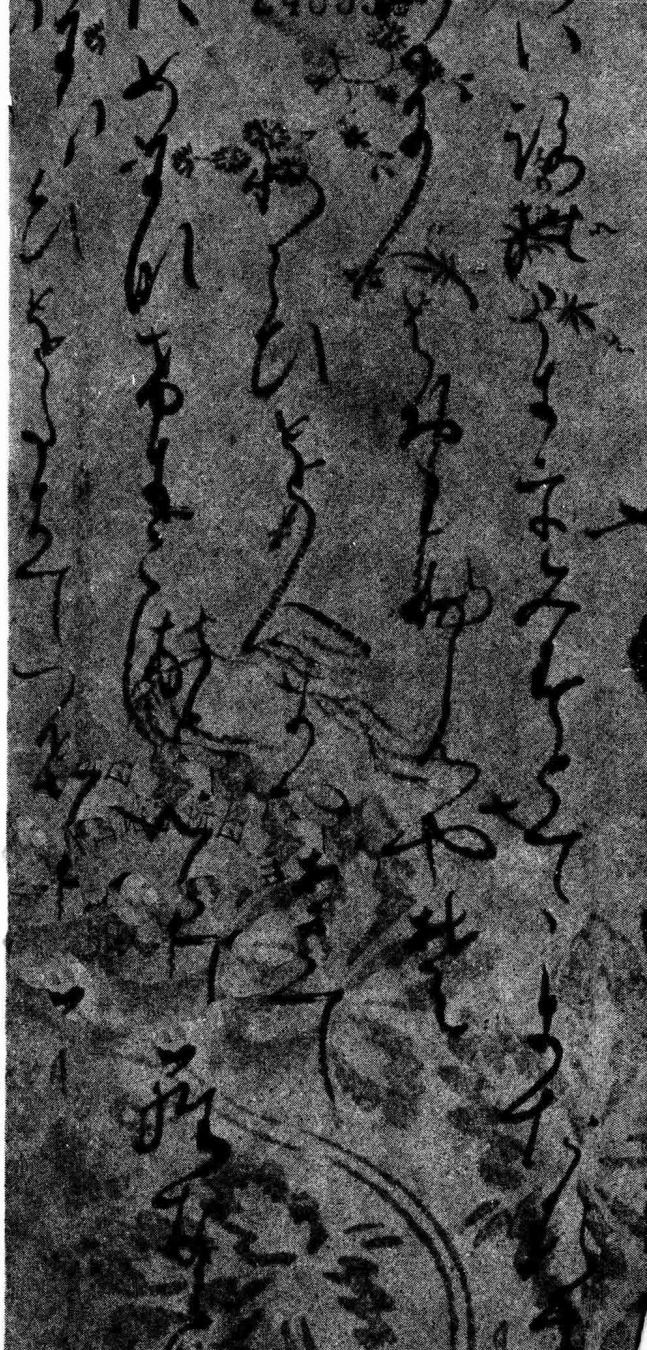
を

本女子
学教授

青木生子著

日本の古典文学

—古典のいのち—



青木生子（あおき、たかこ）

大正9年 東京に生まれる

昭和16年 日本女子大学校国文科卒業

昭和19年 東北帝国大学法文学部国文科卒業

現 在 日本女子大学文学部教授，文学博士

主要著書

『女流秀歌鑑賞』

『古代文芸における愛』

『日本抒情詩論—記紀・万葉の世界—』

『日本古代文芸における恋愛』

『平安鎌倉私家集』（共著）

『茅野雅子—その生涯と歌—』

検 省
印 略

日本の古典文学

昭和49年3月10日 初版発行

著 者 青 木 生 子

発行者 清 水 秋 夫

発行所 株式会社 清 水 弘 文 堂

東京都千代田区猿樂町

小黑ビル 2-4-2

TEL・東京 293-9708

印刷/K. M. S・製本/関口製本

はじめに

展覽会場などへゆくと、よくこんな情景を見かける。作品の前に長いことたたずんで作者の生没年月や作品のいわれのような解説を、熱心にメモしている中学生や高校生などがいる。彼らはメモし終えると一仕事すんだというふうに、あとは作品に一瞥を与えるだけで、次の所へゆきまた同じようにメモにかかる。いったい何のためにわざわざ展覽会場までやってきたのかしら、と私は不思議に思うのである。彼らはたしかに勉強家なのであるが、解説をただ写しにきたのである。めつたに見ることのできない本物を、この自分の目と心とで、しっかりとらえておくことこそが大切なのに、まことに惜しいことである。

これに似たことが、古典文学の勉強などについてもいえそうである。日本の古典文学は、その数もきわめて多い。その作品の一々について、これは幾年に成立し、何巻で、作者はいつどこで生まれて、いつ死んだとか、その他諸々の知識を私たちは知る必要がある。だが、そうしたいわば解題的なものを、頭の中にぎっしりつめれば、古典文学がわかったことになるかといえは、私は決してそうは思わない。解説を熱心にメモして廻ると

大差ない。またそうした一通りに必要な知識なら、高校時代の文学史の教科書や、その他辞書類で間にあうのである。

何が一番大切かというに、私は作品そのものにじかに自分の心が触れあうことだと信じている。作品は、読者の前に、ただそれだけのもののために存在しているものである。古典文学に関する教養とは、古典の作品に関する諸々の知識ではなく、その心をしるること、さらにそれを真にたのしむことである。本書の第一章のところでも少しふれたことであるが、この一番大切な点が、とかく古典文学では従来忘れがちであるので、私はこの本ではここに一番重点をおいたつもりである。そして読者と一緒に文学を読む喜びを味わってみようという気持ちでこの本を書いた。

私が古典文学に最初にふれたのは万葉集であった。それは昔の女学校四年生の時であるから、今の高校一年生ごろに当る。長歌は難解だったから短歌を簡単な注釈づきの本で拾いよみした。

石そそく垂水たるとみの上のさわらびの萌もえ出づる春はるになりなりにけるかも

この歌など、あの時の若い気持ちに、何と新鮮にびったり受け取められたことだろう。また名も

ない乙女の

たらちねの母に知らえずわが持てる心はよしゑ君がまにまに

という歌に、はじめてふれたときの私のひそかな感動も忘れられない。私はその後三十年近くも万葉集を学問の対象としていろいろ研究してきたのであるが、歌そのもののエッセンスは、あの頃に感じとつたものと、あまりちがわないような気がする。それほど、作品を生で受けとつたときの心持というものは、大切にしたいものだと思つたことである。

源氏物語をよんだのは、万葉よりずっとあとになる。部分的にはよんでいても、注釈書を傍に、はじめから全部通してよむだけの意志力もなく、またそのみに時間を費すには、外にまだたくさんよみたい本があつたのである。東北大学に入って「宇治十帖」がゼミナールにあつたので、このときにはじめてといてよいほど、やや本格的によんだ。このすばらしさは、ちよつと近代の小説のなかにも無いんじゃないかというのが、読了後のいつわらぬ実感だった。

薫が部屋にしのび込んできたので、何心なく寝入る妹を残したまま隠れ出た大君が、屏風のうしろで、わななきながら見守る心細い様子が、窓外に荒れる風音を背景に語られてゆくところ、また浮舟が二人の男に心を分かつ苦しみにさいなまれ投身するまでの心境はいうまでもな

く、さらに、過去をひたすら否定することで、蘇った浮舟が、ある青葉の夕闇の頃、遠い谷あい
を松明をたくさんともしてゆく比叡婦りの薫の行列を、よそながらはるかに見送っているくだ
りなど、よんでいて私は、ついにおえつを禁ずることができなかつた。映画や芝居などもめ
ったに泣かない私が、源氏物語をよみながら、涙を落した体験は私にとってこころよい思ひ出
である。

私は、こうした古典文学に対する私の生の体験なまを、ついこの間のように蘇らせながら筆をと
ることができた。だが、それはもちろん、勝手気ままな私の感想をここに紹介したつもりでは
ない。

文学の研究は、鑑賞にはじまって鑑賞に終るものだと思っている。その作品から自分が
受けとめたものを、同時に作品そのものの価値判断にまで高め、説明することが文学の研究に
はかならない。この本では、そのような鑑賞を土台にしなが、そこから今日の学問的水準の
高度にふれてゆく道筋をひらいてあるつもりである。

どのようにでも使いこなしてもらうことをこの本は待っている。人によって詩歌を好むもの
と小説を好むタイプとがある。源氏物語を先によむのもよいだろうし、また詩歌の中でも王朝

和歌に興味ある人は、そこから手をつけ初めてもよい。本書では紙面の都合上、詳しくふれられなかった作品がある。わずかに垣間見たすがたに、何ということなしの魅力をおぼえたら、自身でこれを追ってみてほしい。

そんなぐあいには、『日本の古典文学』の中から、何か一つでも心にふれたものを得たなら、そこに枝折りはさんでください。いついつまでのわが心の記念として。一人でも多く心の友が得られることを祈りつつ、この本をお送りします。

日本の古典文学 目次

はじめに

第一章 古典と現代 三

 第一節 古典のいのち 四

 第二節 古典を身近に 八

 第三節 日本文学と世界文学 一七

第二章 日本文学の源泉 二七

 第一節 神話・伝説 二六

 第二節 英雄の物語 三三

 第三節 恋愛のロマンス 四一

 第四節 民謡の発掘 五三

第五節 抒情詩の源泉	三
第三章 万葉集	五
第一節 万葉集の世界	七
第二節 第一期の作家と作品	三
一、舒明天皇	八
二、有間皇子	八
三、額田王	八
第三節 第二期の作家と作品	四
一、持統天皇	四
二、大津皇子	五
三、大伯皇女	五
四、柿本人麿	一〇
五、高市黒人	一四

六、志貴皇子	二六
第四節 第三期の作家と作品	二七
一、山部赤人	二七
二、山上憶良	二四
三、大伴旅人	三三
四、高橋虫麻呂	四〇
第五節 第四期の作家と作品	四四
一、大伴家持	四四
二、大伴坂上郎女	五三
三、家持をめぐる女性	五九
四、狭野茅上娘子	六六
第六節 作者不明の歌	七三
一、東歌	七三

二、その他の歌	二八
第四章 抒情詩の流れ	二七
第一節 平安朝以後の和歌	二八
第二節 古今和歌集	二〇
第三節 王朝女流歌人	二九
一、小野小町	二九
二、和泉式部	二九
第五章 物語の誕生と発展	三三
第一節 物語について	三三
第二節 竹取物語とその発展	三七
一、宇津保物語	三一

一、落窪物語	二三四
第三節 伊勢物語とその発展	二三八
一、大和物語	二四九
二、平中物語	二四九
第四節 女流の日記・随筆	二五一
一、蜻蛉日記	二五一
二、和泉式部日記	二五七
三、紫式部日記	二五八
四、枕草子	二五九
第六章 源氏物語	二六三
第一節 源氏物語の世界	二六四
第二節 光源氏の生涯	二七三

一、榮華の時代	二七二
二、憂愁の晩年期	二八四
第三節 紫上の愛の探求	二九〇
第四節 宇治の物語	二九六
一、薫の宿命	二九六
二、大君の結婚拒否	三〇一
三、浮舟の恋愛悲劇	三〇六
第五節 源氏物語の美しさ	三三二
第七章 伝統と創造	三三三
第一節 古典時代の意義	三四
第二節 中世の文学	三六
第三節 近世の文学	三三

日本の古典文学

——古典のいのち——

第一章 古典と現代